「野球と棒球」――白球がつなぐ日台百年史（前篇）

ジャーナリスト、大東文化大学特任教授　野嶋　　剛

野球は、日本人にとっても、台湾人にとっても、特別なスポーツである。

明治維新を経て、近代化と共に米国から伝来した野球は、あっという間に日本社会で普及した。日本が統治し、近代化を推し進めた台湾でも、ほぼ同時進行的に野球は導入され、高い人気を獲得した。日台双方で、今日に至ってなお、野球は国民的スポーツとして深く人々に愛されている。

私ごとではあるが、筆者自身、無数の少年と同じように、小学校から中学校までほとんどの自由時間を野球に捧げた野球少年だった。厳しいトレーニングで負ってしまった腰のケガで継続を断念するまでの小さな夢は、テレビで毎晩活躍を見ていた巨人軍のプロ野球選手になることだった。いまでも最も関心のあるスポーツは何かと聞かれれば、迷いなく、野球を挙げる。

日本と台湾との間には、野球を通した交流と友情が絡み合いながら、多くの物語が蓄積されてきた。これまでは、映画『KANO』で知られる嘉義農林学校が甲子園で準優勝を遂げる戦前の健闘ぶりや、プロ野球選手で中華民国籍を有する王貞治氏の戦後の活躍など、個別の事例を通して語られることが多かった。その一方で、百年に及ぶ日台野球史をひとつながりの物語として捉えた著作や研究は、日本にも台湾にもあまり見られなかった。

だが、野球ほど、複雑極まりない歴史に翻弄され続けた日台関係のなかでも、暖かいものを失うことなく、過去から現在まで、その原形を保っている事象はないのではないだろうか。筆者は「野球と棒球」の交流史こそ日台関係の具現であり、日台関係を支える土台であると確信している。

筆者は近年、その百年の日台野球史に対して、なんとか一本の糸を通すような形で再構築を行うことができないかと考え、資料収集や当事者へのインタビューなどの作業を少しずつ進めている。まだまだ先は長いが、できれば数年内に一つの著書として完成させたいと思っている。

今回、貴重な執筆の機会をいただいた本稿においては、インタビューなどの紹介はあえて最小限に抑え、すでに発表されている先達たちの優れた研究や著作、歴史資料などの力を借りながら、戦前と戦後に分ける形で、20 世紀から 21 世紀に連なる日台野球史に対する初歩的な整理を試みたい。

●平安野球と台湾原住民選手

日本と台湾の野球交流史は、台北や東京ではなく、京都と花蓮から筆を起こすことがふさわしい。

私の手元に分厚い 2 冊の本がある。一冊の題字は『平安野球部 100 年史』とあり、著者は「平安学園」となっている。2008 年に刊行されたものだ。もう一冊の題字は『平安野球部史』で、著者は「平安高等学校」である。こちらは 1985 年に刊行されている。どちらも 1908 年に発足した平安高校野球部の部史である。もし、平安が強豪校に成長するにあたって、立役者となった台湾の原住民・アミ族の選手のことを知りたければ、1985 年版を手に取ることが望ましい。

なぜなら 2008 年版では、原住民選手たちの記録が相当部分、削られているからだ。2008 年版でどのような編集判断があったのか定かではないが、平安野球を語るにあたり、欠かすことのできない台湾選手の活躍のページが「正史」から減らされたことは、きわめて残念なことである。そのため本書の平安高校（旧制中学時代）に関する記述は主に 1985 年版に依拠している。

平安が、全国の高校野球界で屈指の古豪であることは論をまたない。

夏の甲子園の出場回数は34回、全国3位。通算勝利61勝、全国2位。優勝3回、全国5位。準優勝4回、全国1位。春の甲子園は出場回数41回、全国1位。通算勝利42勝、全国5位。優勝は1回で、準優勝はゼロ。春は初戦敗退も多く、「夏の平安」と呼ばれる由縁だが、春も8強になると13回を数えて全国1位だ。

平安の校名は現在、「龍谷大平安」となっているが、常に全国大会の切符を京都大会で争い、甲子園でも上位進出をうかがう強豪チームであることには変わりない。2014年には苦手だった春の甲子園で初の全国優勝も遂げている。

平安が甲子園の常連となっていくなかで、台湾から「野球留学」した原住民選手たちが果たした役割は、果てしなく大きい。

1876年、5年制の旧制中学時代、平安中は浄土真宗本願寺系の学校として創立された。当初の名前は金亀教校。のちに平安中に改名された。正式に野球部が発足したのは1908年になる。ほかの武道系の部は強かったが、野球部は京都予選では連戦連敗で、弱小チームという立場から、なかなか抜け出せなかった。

その平安中を救ったのが、台湾から京都の地に現れた3人の原住民選手だった。彼らの名前はロードフ、アセン、キサ。いずれも花蓮の平野部に多く暮らしているアミ族の若者たちだった。

花蓮の原住民の若者が、当時は同じ「帝国日本」の一部であったとはいえ、直線距離で1900キロ弱も離れた京都のグラウンドに立った。その事実こそ、今日、プロ野球から学生野球に至るまで、深い交流を続ける日本と台湾の野球交流のスタート地点であり、日本から台湾へ、台湾から日本へ、無数の野球選手が海を渡って白球を追いかける日々の始まりであった。

●日本、台湾への野球の伝来

米国に誕生した「ベースボール」が日本に伝わったのは明治維新からまもない1872年とされる。東京大学の前身である第一番大学区第一中学で米国人教師ホーレス・ウィルソンが、学生たちに教えたことが始まりだった。第一番中学はのちに東京帝国大学と第一高等中学校に分離し、後者の野球部が、明治初期の日本を代表するチームとなった。野球の伝来からしばらくの時期を「一高時代」と呼ぶのはそのためである。ちなみに、ベースボールを野球と訳したのも一高野球部の一員だった中馬庚（ちゅうまん・かなえ）という人物で、一高を卒業した際に部史を執筆した。そこで野球という言葉を思いついたと言われている。

野球は、ほかのスポーツがそうであったように、学校の校庭での課外活動として、日本の欧米文化の受容のなかでお抱え外国人教師たちから伝えられた。米国のようにフィールドでの草野球から広がったボトムアップのスポーツではなく、エリート校の旧制中学を出発点とする、いわば上から下への広がりであった。日本で誕生した漢字二文字の「野球」というスポーツは、その誕生から「近代化」と「教育」という二つの概念を運命的に内部に抱え込むことになったのである

野球にビルトインされた「近代化」と「教育」は、台湾において「教化」という植民地政策と、非常に相性が良かった。教化という概念自体、明治以降の日本時代において、近代化と教育が融合したものだからだ。野球は、日本が台湾で押し進めた教化の一手段として様相を持ちながら、台湾で広がっていく。

本稿において、野球が台湾で教化に用いられたことについて、脱植民地主義的な観点から、批判的な議論を展開するつもりはない。現在の台湾における台湾史ブームのなかで、日本からの野球伝来も台湾史の貴重な一部であると位置付けられている。台湾社会で野球の存在はほぼ完全に内在化され、「棒球」の名前で国技として愛されている。その現実のなかで、野球が台湾で定着していった実相をより克明に描くことが筆者の関心であり、

役割でもあると考えている。

●野球の台湾伝来

日本に伝来した野球が台湾に渡った時期は1900年前後とみられ、日本で「野球」という訳語もすっかり定着していた。台湾へ仕事や移民で渡った日本人たちの間で、野球を公園やグラウンドで楽しむ人々が現れた。

台湾で最初のチームは、1906年、総督府国語学校中等部（後の台北一中）に生まれた。日本の第一高等中学と同じエリート校というところが興味深い。まもなく同じ国語学校の師範部でもチームができ、両者の戦いは多くのファンを惹きつけた。いったんは日本で湧き上がった「野球害毒キャンペーン」の影響を受けてブームは衰退しかけたが、1909年には再び台北に複数のチームが生まれた。そんな野球熱は、日本人が多く移住した花蓮にも伝わっていき、台湾で最初の台湾人による野球チームが立ち上がった。その立役者になったのは、台東生まれの林桂興という人物であった。

1897年生まれの林桂興は漢民族だとされるが、台湾メディアの取材に対し、原住民の血統も入っていたと遺族が証言している。20歳のとき、台東を離れ、花蓮へ移住した。台湾東部では、台東から花蓮まではいわゆる細長い花東平野が広がり、当時から一つの生活圏を作っていた。花蓮から北の宜蘭にも、台東から南の屏東にも、ともに険しい山がそびえ、その分、二つの地域の結びつきは強い。台東より花蓮のほうが都会なので、学業や仕事の関係で移動する人も多かった。

林桂興の人生に関する一次資料は多くない。台湾の野球史研究者にとっても悩ましいところのようだ。学生時代から野球の経験があった林桂興は、花蓮で就職したときから「朝日組」という企業チームで投手を務めた。

林桂興は、アミ族の運動能力を知るに至り、若者14人からなる野球チームを結成し、1923年に成立する伝説の野球チーム「能高団」の母体となる。林桂興はこのチームを「高砂棒球隊」と名付けたと、台湾側の文献に記載するものもある。ただ、この当時、台湾で「棒球」という用語が使われていたかどうかは今後の検証を要する。というのも、野球を棒球と訳したのは当時の中国の中華民国政府であり、日本の統治下にあった台湾で棒球と呼んでいたとは考えにくい。1915年ごろに中国大陸での野球の訳語は「棒球」にほぼ統一されたが、それまでは「棒球」以外に「撃球」「棍球」「野球」「塁球」「木球」などが混在していた。

台湾での原住民は、オーストロネシア系民族が大半で、17世紀以降に渡来した漢民族と同化した「熟蕃」（平埔族とも呼ばれる）と、同化していない「生蕃」に分類され、花蓮の原住民は主に「生蕃」で、そのなかでも山岳地に住む原住民と平野部に住む原住民に分かれた。

アミ族は花蓮から台東の平野部に多く分布し、人口的には最大勢力で、日本人との関係も早い段階から深くなった。林桂興はやり手の人物だったようで、日本統治時代に花蓮の地方議員や商工会議所のメンバーにもなったとされる。しかし、戦後は1947年に起きた台湾民衆弾圧事件「2・28事件」に巻き込まれて当局に逮捕され、一度は救い出されたものの、最後は潔白を示すために切腹自殺で果てるという悲しい結末を迎えている。

●花蓮港庁長・江口の戦略

林桂興のもとで野球を覚えた若者たちはすでに花蓮で広がっていた野球熱のなかで各チームと試合を続け、次第にその尋常ではない強さが世に知られるところとなった。これに目をつけたのが、当時の花蓮港庁長である江口良三郎だった。当時の台湾には「五州二庁」があり、花蓮港庁は現在の花蓮県に等しい広大な行政区画を有した。庁長は現代の知事に等しい立場であり、江口良三郎は第五代花蓮庁長として花蓮に二つのものを残したと言われ

る。一つは花蓮港であり、もう一つは野球である。

花蓮の港に面した緑地に一つの記念碑がある。入り口には小さな鳥居があり、台座には「江口紀念碑」とあり、石碑には「江口廳長頌徳碑」と刻まれている。おそらくは石碑はかなり前からあり、台座は新たに整備されたものだろう。花蓮は海岸から離れるとすぐに海が深くなるため、歴代庁長は築港に苦心していたが、江口良三郎は海岸線を内側に削る方法で港を完成させる業績を残した。

江口良三郎は 1871 年、佐賀県で生まれた。1895 年の日本の台湾領有の際、陸軍の兵士として台湾に渡り、警察官として台湾に残った。台湾各地を転々としながら次第に理蕃事業の最前線に立ち、理蕃政策立案にも関わった。1920 年、花蓮港庁長に就任した。原住民の多い地域であったので、その手腕を期待されたことが想像される。

林桂興が立ち上げた原住民チームに、江口良三郎は組織的な訓練を受けられる環境を整えたということになる。試合は花蓮の街の高台にある花崗山グラウンドで行われた。ここではいつも野球の試合を自由に見ることができて、台湾東部野球のメッカとなっていた。その野球チームのなかに花蓮港庁の「庁団チーム」があり、主将を務めていた門間経祐を監督に招く。花崗山グラウンドが能高団の練習場所となった。江口良三郎はメキメキを野球の腕を上げる選手たちについて、こう評している。

「蕃人は幼少の頃から小鳥を獲る為に小石を投ずるの風習に慣らされている。だから野球技に於てその投球の正確なるは殆ど先天的といって過言ではない。加ふるに走塁にかけては全く隼の如く、その敏捷なる動作においてまた体力の強健な点に於て、またバッテングの利く点に於て、これを適當に訓練誘導するならば、凡そ野球技に必要とすべき要素を彼等は先天的に十分に具備している」

アミ族は半農半漁で生計を立てていて、海や川で魚をとっては日干しにして保存していたが、それを狙ってやってくる鳥たちに小石を投げて追い払うのがアミ族の子供たちの日課であったとされる。これが本当に野球の技術につながったどうかは断定できないが、「原住民は子どものころから石を投げていたので野球に向いている」というストーリーは、その後も繰り返し、原住民出身の野球選手を評するときに語られていく。

この江口良三郎の見解は、のちに日本のなかで台湾選手、特に原住民選手に対する評価一般をほぼ説明し尽くしていると言える。走攻守すべてにおいて彼らには優れた素質にあふれており、野球に適性を有している、という視点だ。これは、戦後の台湾にも引き継がれている。

台湾では日本の統治時代、山には「高」が付けられた。とにかく台湾の山は高い。富士山よりも高い山々がたくさんある。台湾山脈に押し付けられたフィリピン海プレートの圧力による隆起のためである。能高山は標高 3266 メートル。台湾三高と称された新高山（現在の玉山）、次高山（同雪山）と並んで称された。いうまでもなく、日本の真珠湾奇襲攻撃の暗号である「ニイタカヤマノボレ」はこの新高山からつけられたのである。能高山は今日でも同じ名称で呼ばれている。

能高団は「NOKO」と呼ばれた。のちの「KANO」を彷彿とさせる名前である。ユニフォームはカーキ色で「NOKO」の大きな文字が刻まれた。江口良三郎が原住民対策で能高山を調べ歩いた経験から、その名前がつけられと考えられるという。あるいは、農業学校が母体なので「農高」の NOKO と能高をかけた可能性もある。

●能高団、台北、日本へ遠征

成立直後から能高団は顕著な成果を挙げた。1924 年、台湾体育協会の招聘で日本の職業野球チーム、大毎野球団が台湾へ遠征したとき、試合を行った。結果は 22 対 4 の敗北であったが、選手たちの才能に大毎のメンバーは驚いたという。その年には能高団は台湾西部への遠征試合を行ったところ、中学や社会人チームとの対戦でも、5

勝５敗の好成績を収めた。

その試合ぶりは、とにかく鮮烈な印象を残したらしく、台湾全体から拍手喝采が浴びせられた。これに対して、江口良三郎は台湾日日新報の取材に対し、「『能高団』の西部遠征は非常な成功であった。チームには賛辞と同情が寄せられた。また選手たちの純真なプレー振りが十分に認められたことに感謝したい」と満足気に語っている。

能高団は、1925年７月、船による長旅によって日本を訪問した。東京、横浜、名古屋、京都、大阪、広島などで合計８試合を行い、３勝４敗１引き分けという予想をはるかに上回る好成績を収めた。ここで能高団が戦った相手は、全国大会で強豪として名を馳せていた早稲田中（６－６で引き分け）や広陵中（３－２で勝利）などであったが、その中で対戦した相手に京都府立師範があり、13対３で能高団の圧勝に終わっている。このことは、京都の野球関係者に大きな衝撃を与えた。京都では野球に力を入れようとしていたが、全国大会では一回戦や二回戦での負けが多かった。ここで京都と能高団の縁が生まれ、次の「原住民選手の京都招致」につながった可能性もある。

●仏教の縁で平安へ３選手

日本から台湾に戻った能高団は、歓喜の声で迎えられた。ここで思わぬことが起きる。能高団の活躍に目をつけたある人物が、主力選手を日本へ野球留学させようと思い立ったのだ。その人物は本願寺派の布教史である武田善俊という。

本願寺派は台湾統治初期から政府の原住民統治政策の一翼となりながら布教活動に従事し、他宗派よりも積極的かつ広範囲におよぶ布教の成果を挙げていた。

1935年時点では、花蓮のなかには花蓮港、吉野、豊田、林田、鳳林、玉里に本願寺の布教所が開設されていたというから、かなりの力の入れ方で、これらの土地の多くが、日本人の農業移民が開いた地区である。

武田善俊も、京都から花蓮に派遣されていた。当時の年齢は30歳前後であったと思われる。平安野球部史によれば、武田善俊は1918-19年にかけて、草創期の野球部において、監督ではなかったが「指導者」を務めていたと書かれている。

台湾にいた武田善俊は迷いなく平安中にコンタクトを取った。当時、野球部を作ったもの成績的には苦戦が続いていた平安中に台湾から赴いてプレーさせたのである。日本のプロ野球では外国人選手のことを「助っ人外国人」といまも呼んでいるが、日本の歴史上、おそらくは最初の助っ人となったのが、日本に野球留学した原住民選手だった。ただ、彼らは台湾人でありながら、日本国民であったので、厳密には「助っ人外国人」ではなかったが。

武田善俊の斡旋で、最初に台湾から日本に渡った能高団の選手は、ロードフ＝羅道厚、アセン＝阿仙、キサ＝紀薩の３人であった。平安入学にあたって日本式の名前をつけた方がいいと考えた武田善俊は、ロードフは現地語でバナナを意味するが、伊藤次郎という名前をつけた。アセンは家に回りに水田があり、アセンは陽の当たる場所という意味なので、稲田輝夫になり、キサは理由は名前を音の近い西村喜章になった。

当初、平安中の佐藤秀吉監督は伊藤次郎を上手投げにしようとしたが、コントロールが定まらない。横手投げに近いスリークォーターに変えてみると、面白いようにストライクが入った。野球部史には「伊藤のピッチングの相手をし、外角低目を百球投げさせると80球は構えたミットを殆ど動かさないで済むところにピタリと投げてきたのに佐藤も舌を巻いた」とある。伊藤次郎は中学一年生で身長175センチ、体重80キロと豊かな体格を持っており、俊足でベース一周14秒二塁からホームまでの加速が素晴らしかったという。

だが、俊足という意味では遊撃手を務めた稲田輝夫がさらにすごかった。平安野球部史にはこう

書かれている。「稲田は三人の中では一番小柄であったが、一塁まで３・７秒、ベース一周 13 秒７で走った。佐藤監督は、稲田が出塁すれば無死の時でも盗塁させた。送りバントの必要がなく、成功率は 100％に近かったという」。ベース一周 13 秒７が本当ならばこのスピードはイチロー並みで、プロ野球でも俊足選手としてやっていける。

稲田輝夫については、「快活で陽気な反面、非常に神経質な一面を持っていた。大試合の前夜など寝付かれないことが多く、神経性の下痢などをよくおこしていた」という。

西村喜章は外野手から後に保守にコンバートされた。佐藤監督の判断で右打ちから左打ちに変えられたが、すぐに慣れて強打を発揮したという。いわゆる鉄砲肩の持ち主で、二塁に「矢のような」ボールを送球するので有名だった。投手を務めた稲田照夫が、西村喜章の送球を避けるために頭を下げるのが間に合わずに二塁送球に直撃されることがしばしば起きたという。野手たちは、手の痛みで悲鳴を上げるほど、西村喜章の送球は威力があった。

彼らの留学について、平安野球部史は「台湾より名選手来る」と題して、「彼等のパワーとスピードは当時の中等野球では傑出しており、伊藤の高めの球はバットの上を飛び越すようにホップし、右打者の外角低めに決まる球には打者は手も足も出なかった」「高砂族・アミ族選手たちは幼児から山野を裸足で駆けめぐっているので足腰の強さは勿論、それに加えて、石を投げて鳥を獲るという特技を習得しているので、肩の強さとコントロールは絶妙であった」と詳しく紹介している。ここでも石投げ説が語られている。

●平安時代の幕開け

この３人が加入した 1926 年、つまり昭和の幕開けが、平安中黄金時代の始まりとなった。

1926 年の第 13 回全国中等野球京津大会で、平安中は快進撃を見せる。一回戦で京一工を 12 －０のコールドで下すと、二回戦で京二商、準々決勝で京一商、準決勝で京都師範、決勝で京一中を７－１で破った。いずれも大差で全国大会の壁をあっさりと突破してしまった。決勝戦のラインアップは、伊藤が七番でエース、四番が西村、五番が稲田と、平安の中核を能高団出身選手が担っていた。

決勝戦で伊藤の投球は圧巻だったらしく、審判を努めた武田愛一は「平安の伊藤は昨日より制球を保つ　曲線（筆者注・カーブ）はゆるいが、大きく破れて一中の健棒を完全に封じていた」と戦評で述べている。

甲子園で平安中は、初戦の二回戦で台湾代表の台北商に５－３で競り勝った。大活躍したのは、稲田、伊藤の能高団コンビで、伊藤は四打数四安打、稲田は本塁打と二塁打を放ってほぼ二人で全打点を叩き出した。高校野球の父とも呼ばれる朝日新聞記者の飛田穂洲は「勝因は愛すべき三台湾人の健闘にあらう」と記す。三回戦での松本商との対戦では、６回まで双方無得点の投げ合いとなったが、八回に平安が七失策と守りが崩れて６－０で敗れた。飛田穂洲は「この試合平安の善戦、伊藤の好投は忘れてならぬ」と書き、能高団出身選手びいきをここでも見せている。

1928 年の春の全国選抜中等学校野球大会にも初出場を果たした平安は一回戦で、嘉義農林の監督となる近藤兵太郎が指導していた松山商（この時点で近藤は嘉義に移住していた）と対戦し、６－０で敗北している。この時はまだ全国の名門との差は大きかった。この大会から、伊藤次郎の弟である伊藤正雄が平安中に加入し、９人のスタメンのうち４人は能高団選手となった。まさに能高団あっての平安中の躍進であった。

●全国準優勝を果たす

この年の夏、京都ではもはや敵なしの平安中は２度目の甲子園に楽々進出した。一回戦では八戸

中を５－０で難なく退け、二回戦では福岡中に４－２、三回戦では甲陽中に４－３と接戦をそれぞれものにした。伊藤次郎の真価が発揮されたのは準決勝の北海中との対戦だった。伝統校として平安と出場回数を後に競うことになる北海中に対して、無安打無得点の好投を演じて、６－０で快勝した。決勝戦では３－１で松本商に惜しくも敗れ、初の栄冠は逃したが、平安中は全国区の強豪に成長したといえるだろう。

決勝戦では、最終回の追い上げのチャンスに伊藤次郎が本塁に突入してアウトになったことが平安の敗因だと、飛田穂洲は分析している。「しばしば暴走しをして敵失に恵まれていた伊藤（兄）は肝腎な時に失敗した。投手でもあり、かたがた今後は聊か考慮せねばなるまい」と指摘しているが、彼らの活躍を見守ってきた記者ならではの愛情に満ちたアドバイスに読める。

平安中で、伊藤兄弟や稲田輝夫の活躍は1929年や1930年も続いた。この間、春夏いずれも甲子園出場を果たし、平安は甲子園にはなくてはならない常連校として定着した。その間、平安は優勝候補と言われながら、準決勝や準々決勝で敗北し、優勝旗を手にすることがないまま、伊藤次郎や稲田輝夫らは卒業を迎えることになる。すでに全国に名を響かせた平安は、台湾人選手が抜けたあとも優秀な選手の獲得や強化に困ることはなくなった。

伊藤次郎は平安中から法政大学に進学する。大学では４年生からエースとして活躍しリーグ優勝も経験。東京六大学リーグ通算５勝２敗の成績を残した。そのあとはプロ野球セネタースに入団した。詳しい経緯はわからないが、投手から野手として出場したが、４年間で退団しており、平均打率 .183、本塁打ゼロと振るわなかった。弟の伊藤正雄も平安中から法政大学に進んだが、伊藤次郎と違ったのは大学卒業後すぐに花蓮に戻って教員になったことだ。伊藤正雄は戦後の花蓮野球にも貢献しており、次回以降で詳しく触れてみたい。

伊藤兄弟や稲田らより遅れて平安中に渡った花蓮の原住民選手の中で、日本野球史に輝く名前を残した岡村俊昭（葉天送）という選手がいた。

1912年花蓮生まれのアミ族で、「能高団」の一員でもあった。1929年、平安中野球部の一員となる。岡村俊昭は捕手だった。平安中が常勝軍団に上り詰めていくなか、合計９回にわたって甲子園の土を踏んでいる。いまの３年制高校では、夏３回、春２回の最大５回しか出場できないが、このときは旧制中学の５年制だったので夏５回、春４回の合計９回の出場ができたのだ。それだけ当時の平安中は京都で圧倒的な力を誇っていた。

岡村俊昭はその後、日本大学に進み、1939年にプロ野球・南海に加入し、1944年には首位打者を獲得している。この年は戦争のため試合数は少なかったとはいえ、３割６分９厘という高い打率で、当時、岡村俊昭が所属している近畿日本は低迷していて勝率が３割２分４厘しかなく、チーム勝率よりも打率が高い首位打者という珍記録となっていた。捕手から外野に転向していたので、失策が多く、外野手として一試合最多失策の記録を持っている。

戦後もプレーを続け、1949年に引退し、南海で名勝鶴岡一人のもとコーチとして辣腕をふるった。「親分」と呼ばれた鶴岡一人に対して、岡村俊昭には「大将」というあだ名がつけられるほど面倒見がよく、選手たちからは慕われていた。その後もスカウトとして南海に貢献し、1996年に亡くなるまで、京都の平安高校の近くに暮らしていた。

●嘉義農林と近藤兵太郎

1930年に岡村俊昭が平安中で活躍していたとき、嘉義農林で監督を務めていたのは、愛媛・松山出身の近藤兵太郎だった。松山といえばもともと野球の盛んな土地柄であり、野球大好きの文人・正岡子規を生んだ街である。

松山商で主将、ショートを務めた近藤兵太郎は、

1907年に卒業すると、そのまま松山商でコーチとなり、1917年に監督になった。ところが1919年に近藤兵太郎は台湾へ嘉義商工専修学校の教諭として台湾に渡った。ただ、近藤の手腕を見込んだ学校側の求めで監督は続け、毎年夏に台湾から戻り、松山商野球部を指導した。そんな遠隔操作のような監督であっても四国大会では常にトップを張り続け、1925年にはとうとう全国制覇の偉業を成し遂げた。つまり、松山商を一流校へ導いたのは近藤兵太郎をおいて他にないのである。

その松山商のあと、甲子園の新しい主役として台頭した平安中が1930年に台湾に遠征を行っている。岡村俊昭ら原住民選手が活躍していることに、近藤兵太郎は「あれを見ろ、野球こそ万民のスポーツだ。われわれには大きな可能性がある」と語ったと伝えられる。平安中はこの台湾遠征で十戦全勝の成績を収めた。高いレベルの平安中野球のなかで、縦横無尽に活躍する原住民選手の姿に近藤兵太郎が刺激を受けた可能性は高い。

嘉義農林は1919年に創設され、野球部は1928年に発足した。当初の成績は平安中と同じで、大会に出れば負けるというものだったが、松山商で指導経験を持った近藤兵太郎が監督についたことによってチーム力は次第に強化されたとは周知の通りだ。嘉義農林の特徴は日本人、本島人（漢民族）、原住民の「三族協同」の野球である。1931年の全島大会で優勝して代表となったのである。

いわゆる「三族協同」のチーム構成について、『KANO』や一般的な理解では、近藤兵太郎氏の独創的な発想であるかのように伝えられている。ただ、嘉義農林に野球部が創設された時点からすでにメンバーは日本人、漢民族、原住民から構成されていた。その時点では、代数の常勤教員である安藤という人物が監督をしていたが、野球の経験はなく、野球部の成績も一向に向上しなかった。その後、同じ嘉義で別の学校にいた近藤兵太郎が請われて監督に就任した、というのが普通な歴史記述である。

一方、注目されるのは、近藤兵太郎は嘉義農林の監督に就任する前から、台東で原住民の野球選手をスカウトしていると、日本統治時代の原住民野球選手を研究した林勝雄は、指摘している。つまり、近藤兵太郎は、嘉義農林に存在している原住民選手だけでなく、積極的に嘉義から遠く離れた選手たちをスカウトしていたのである。台湾の野球評論家、黄国洲も「近藤兵太郎は台湾まで出かけて野球選手を集め、その選手らが後のチームの主力となった」と自らのコラムで書いている。

確かに、初代嘉義農林野球部の東和一は推薦枠で嘉義農林に進学しているが「1927年、私は台東からはるばる長い道程を越えて、憧れの嘉義農林学校に入学した」と語っている。

そうなると原住民選手が入学してから、野球部は発足しているので、嘉義農林野球部の創設に、近藤が関わっており、その前に原住民選手を台東から集めて野球留学させていた可能性すらあるように思える。嘉義農林にはたまたま原住民選手が集まっていたのか、それとも近藤らがスカウトをしてまで原住民選手を集めようとしていたのか、今後の調査でより詳しく検証していきたい。

●絡み合う日台の野球人材

嘉義農林の甲子園準優勝で活躍したのは、なんといっても、エースで4番の吳明捷である。新竹客家の家庭に生まれ、農業を学ぶために嘉義農林へ。最初はテニス部だったが、近藤兵太郎に才能を見出されて野球部にスカウトされた。豪速球で制球力もいいとあって、台湾予選から他校を圧倒する力を見せた。甲子園でも、一回戦の神奈川商工を相手に一安打完封勝利。決勝まで進んで、中京商業の吉田正男に投げ負けた。嘉義農林卒業後、日本に渡って早稲田に入学し、野手に専念しても六大学屈指の強打者として大活躍。後に長嶋茂雄に破られるまで日本記録だったシーズン6本の本塁打を活躍した。プロから声がかかるも「お

金をとって野球はできない」と入団を断ってノンプロに入った。戦後も日本にとどまり、毎日新聞の記者となった。今日、台湾・嘉義市中心部にある投手の銅像は吳明捷であり、KANOの象徴としての存在感はなお圧倒的だ。

実は嘉義農林は、その後も強豪チームとして台湾で名を馳せ続け、三度に渡って甲子園に出場している。1935年の甲子園出場で嘉義農林は一回戦で平安中学とぶつかった。この頃の平安中は、台湾選手の活躍もあって甲子園の常連高となっていたが、嘉義農林が4－1で勝利を収めた。二回戦で嘉義農林が対戦した相手は、近藤兵太郎とゆかりのある松山商。このとき松山商の監督は森茂雄という人物が務めていた。試合は接戦になったが最後は一点差で嘉義農林が敗れて甲子園を去った。松山商はそのまま優勝まで駆け上がり、全国制覇を勝ち取るのである。1935年の夏の甲子園は、平安中、嘉義農林、松山商という台湾にゆかりの深い三つの学校の運命が交錯した大会であった。

優勝監督となった森茂雄は、嘉義農林とは縁が深い。選手時代の1928年、初の選抜大会に出場した松山商の一番打者は森茂雄だった。一回戦で対戦したのが、原住民選手を主力とする平安中であった。森茂雄は戦後、プロ・アマ球界の有力指導者となり、日台の野球交流にも欠かせない人材となった。

1935年の嘉義農林のメンバーは多彩であった。特にのちの野球史に名前を残したのが呉波だ。後に日本に帰化してから呉昌征と名乗ったが、俊足強打の外野手として実力を発揮し、松山商業戦では、ヒットで一塁に出塁とすると、三球で二盗、三盗、本盗を決めて一点をとるという離れ技を見せた。裸足でプレーしたことも話題になった。

1937年に巨人に入団し、いきなり中堅手のレギュラーを獲得、1942年と1943年には首位打者と盗塁王に輝き、1943年には最高殊勲選手にも選ばれている。そのガッツあふれるプレーから「人間機関車」と呼ばれた。興味深いのは、阪神に移籍したあとの1944年には、巨人の呉新亨と一緒に盗塁王に輝いた。呉新亨もまた嘉義農林の出身の選手であったことは奇遇であった。呉波は戦後投手にも転向し、1946年にはチームトップの14勝を記録。打撃でも291でリーグ14位という好成績を収めており、日本野球で最も早い時期に二刀流を実践し、日本で最も成功した台湾選手といえるだろう。

●準優勝の後は

嘉義農林の活躍については、伝説となった甲子園初出場、準優勝が知られているが、その前後の台湾チーム、そして、台湾と同じように「外地」から甲子園大会に参加した朝鮮や満洲のチームことも見ておきたい。

甲子園が朝日新聞と毎日新聞という新興メディアを主催として味方につけながら急速に発展を遂げていったのが1910年以降であり、1915年に第一回の「全国中学校優勝野球大会」が開催され、1924年には甲子園での開催となった。台湾チームが最初に参加したのが1923年である。元台湾総督府の民政長官で大阪毎日新聞の取締役を務めていた下村宏が台湾を訪問し、甲子園の参加を打診した。1923年に台湾で予選が開催され、台北一中（現建国中学）が代表権を勝ち取った。すでに朝鮮と満洲が出場していたので、台湾の参加は遅い方であった。

1931年に初出場した嘉義農林が準優勝を勝ち取ったことがかなりのサプライズであったことは想像に難くない。ただ満州や植民地・朝鮮から参加していたチームも負けず劣らない成績を残していた。第7回大会から参加した朝鮮からは釜山商、満洲からは大連商が出場し、それぞれベスト8とベスト4の結果を残している。特に大連商は出場するたびに好成績を収めた。第十回大会はベスト4、第11回大会もベスト4、第12回大会は嘉義農林と同じ準優勝を記録したのである。台湾代表も、台北工業がベスト8、第13回大会では台

北一中がベスト４に進出している。台湾代表も、嘉義農林の前からレベル的には全国に伍していくチーム力を有していた。

台湾のチームはだいたいが「日本人のみ」か「日台（本島人と原住民）混成」の両タイプだったのに対して、朝鮮のチームは日本人主力か朝鮮人主力かではっきり分かれていたようだ。朝鮮予選が開かれた最初の二回は、日本人チームしか参加しなかったが、第三回予選からは朝鮮人チームも参加し、地区予選の決勝戦は、日本人だけの伝統強豪校の京城中と、朝鮮人だけの徽文高普の対決となり、徽文高普が圧勝して初の甲子園に歩を進めた。

初戦となった二回戦では満洲代表の大連商を破ったが、準々決勝では立命館中に惜敗した。この時のベスト８は朝鮮代表の最高結果であり、台湾におけるKANOフィーバーに先んじて外地チームの活躍があったわけである。

台湾と異なっていたのは、徽文高普の甲子園参加の是非を問う声が徽文高普の帰国後に上がったことだった。朝鮮民族だけの大会を開催すべきだという意見が出たとされ、結局は朝鮮では大会参加は続けたが、徽文高普以上の成績を上げるチームは現れなかった。そこに朝鮮内の複雑な感情が影響したかどうはわからないが、日本の台湾統治と朝鮮統治の違いを見るような思いである。

帝国日本の版図を示すナショナリズム的な狙いもあったとされる「外地」チームの参加のなかで、台湾、朝鮮、満洲の代表校は、1935年以降は甲子園ではほとんど勝利を挙げられなくなる。日本が戦時状態に入っていくなかで、外地では生活が厳しくなるなど野球に避ける余裕が減ったことも響いたとみられる。1941年の大会を中心に甲子園大会は中断され、外地からの挑戦は終わりを告げた。外地チームの活躍は、日本のアジア拡張の間に咲いた徒花のようなものだったといえるだろう。だが、甲子園での地元出身選手たちの活躍は、それぞれの土地に野球という種を植えるのに大きな意味を持ったことも事実だ。特に、台湾と朝鮮においては、野球がいまも国技のように扱われているほど熱心なのは、この時代に野球に親しんだ人々が、日本人が敗戦で去ったあとも野球の伝統を受け継いだからだ。

●原住民選手の活躍について

能高団にしても平安中学にしても嘉義農林にしても、多くの原住民選手が野球における才能を発揮し、注目されることになった。

その点について、日本本土でも台湾でも、肯定的な目線が注がれたが、ある種のステレオタイプがあったことがわかる。

一つは「日本の台湾統治における『教化』（あるいは文明化）のお手本である」という見方である。

原住民選手の活躍のなかで、甲子園では記者たちに日本語をしゃべれるだけで驚かれ、選手たちが傷ついたシーンは『KANO』でも描かれていた。無理やり固定概念にあてはめようという報道が多かったのも事実で、当時の新聞には「昔蕃人、いま文明人」といった見出しが飛び交った。

今日からすれば差別的感覚で受け止められるもので、いまの我々の価値観にはそぐわない。一方で、甲子園大会などの全国区のスポーツでは、地方のチームが都会のチームを打ち負かすところが醍醐味の一つであることは否定できない。「地方ならではの練習方法で特殊な技能を身に付けた野性味あふれる選手たち」というような報道の仕方は（例えば徳島の池田高校など）戦後の高校野球でも常に見られるものである。

もう一つのステレオタイプは「野山を駆け回っていたので、体力が優れ、足が速く、力が強い」というところを強調するところである。

ただ、原住民の特殊能力への言及は、彼らの実力に対する敬意と評価にも転じる部分もある。嘉義農林の近藤兵太郎の名言に「蕃人は足が速い。漢人は打撃が優れている。日本人は守備に長けている。こんな理想的なチームはない」というもの

があり、映画『KANO』でもキーワードになった。

人種ごとに能力が違っていることを強調するのは、「正しい」指導者の意見ではないかもしれない。しかし、近藤兵太郎の意見に「植民地主義的だ」という批判が台湾で寄せられたと聞いたことはない。花蓮の江口良三郎も同様だが、彼らが差別主義者でないという信頼があるからだろう。

このように、原住民選手へ評価は常に二面性を持っており、一方的に差別的だと認定するのは慎重でありたいが、必要以上に特殊能力を強調する必要もない。ただ、スポーツの能力にあたって人種や民族によって能力に差があることも認められた事実であるので、難しいところだ。

植民地・台湾における野球の導入においては、単純化しえない複合的な日台の関係性や台湾の多様性が投影されており、丁寧な論考が必要になる。筆者としては、その部分については今後の調査で一定の整理を進めていきたい。

●戦前から戦後へつながるDNA

こうして歴史の流れを丁寧に見てくると、戦前の日台における野球交流は、日本側は平安中、松山商、台湾側は能高団、嘉義農林を軸に展開されたことがわかる。そのなかで松山商を除いて鍵となる役割を演じていたのは原住民の選手たちだった。４つのチームは、時に直接的に、時に間接的に、原住民選手たちの活躍を通して絡み合いながら、草創期の日台野球界の主役を演じた。

台湾に蒔かれた野球の種は、最初は花蓮で能高団という小さな花を咲かせ、それが日本に逆輸入され、平安中という名門を生み出し、平安中のライバル・松山商から台湾に渡った近藤兵太郎は、嘉義農林でその能高団の伝統を引き継ぐ原住民の選手たちの活躍もあって、さらに大輪の花を咲かせた。そんな風に戦前の日台野球交流史をまとめることができるだろう。

彼らの野球が、海を超えて結びつきながら、野球のDNAが台湾に根付くことに大きな意義を発揮したのである。そして、そのDNAは、1945年の日本の敗戦で途切れたように見えたが、決してそうではなかった。NOKOとKANOを継ぐ者たちが集結したのは、花蓮でも嘉義でもなく、台湾の東部にある台東という地であった。

（次回は６月号掲載予定）

【日台野球史年表（戦前）】

1868年　明治維新
1872年　ベースボールの日本伝来
1900年頃　野球が台湾に伝わる
1906年　台湾に初の野球チーム誕生
1915年　初の全国中学校野球大会（後の甲子園大会）が開催
1917年　近藤兵太郎が松山商監督に就任
1923年　花蓮に能高団発足、台湾代表が甲子園に初出場
1925年　近藤率いる松山商が全国制覇、能高団の日本遠征で好成績
1926年　原住民選手が平安中野球部に加入
1928年　平安中が甲子園準優勝、嘉義農林野球部が発足
1931年　嘉義農林、甲子園初出場初準優勝
1935年　甲子園で平安中、嘉義農林、松山商が対戦

参考文献：

図書／仕淵『台灣棒球一百年』（玉山社）、古川勝三『台湾を愛した日本人Ⅱ「KANO」野球部名監督―近藤兵太郎の生涯』（アトラス出版）、川西玲子『戦前外地の高校野球』（彩流社）、小野容照『帝国日本と朝鮮野球　憧憬とナショナリズムの隘路』（中央公論新社）、鈴木明『ああ台湾！　郭泰源たちのふるさと』（講談社）『平安野球部史』『平安野球部100年史』

論文／林勝龍「日本統治下における理蕃政策と蕃人野球チーム「能高団」」、中西直樹「本願寺派の台湾布教史」、高嶋航「なぜbaseballは棒球と訳されたか、翻訳から見る近代中国スポーツ史」